巻頭言

「聞こえることと話すこと」

理事長　新谷　友良

個人的な聞こえの履歴ですが、私は聞こえが悪くなっても自分の声の聞き取りはある程度できていました。（と自分で思っていただけかもしれませんが・・・）過去形で書きましたのは、今は人工内耳の手術を受けて、自分の声を聞きとることができる、自分の話し方が普通だ、変だと分かる自覚があります。

聴力が落ちていく中で様々な恐怖がありましたが、そのなかでも「いずれ自分の声も聞こえなくなるのでは？」というのは非常に大きな恐怖でした。100 デシベル以下に聴力が落ちて、しゃべることに少し無理をしている感覚はあったのですが、とにかく声を出して人と話すことができていたのは、自分の声がある程度聞こえていたのが大きな原因だったと思っています。もし自分の声が全く聞こえていなければ、話す内容を確認する方法がなく、口の形、舌・声帯の動きの感覚的な記憶に頼って自分の話を確認することになり、それは非常に不安定なもの、不安なものではないかと思います。

聞こえることと話すことは密接な関係にあることは常識的に理解できるのですが、私たちの周りではあまり「話すこと」についての議論を聞きません。聞こえている人にとっては、話すことはあまりにも当然のことなので問題を意識することも少ないのかもしれませんが、聴覚障害者にとっては聞こえそのものに大きな課題を持っているので、話すことの問題は二の次になっているところもありそうです。

人工内耳の手術を受けて 1 年経過して聞こえの回復は道半ばだと感じていますが、最近道半ばの聞こえで聞き取った話（もっといえば歌など）を自分の声で反復録音して聞くことをやっています。その録音した自分の声は非常に奇妙です。聞き取った話と録音した自分の話の調子はかなり違っています。歌であれば、はっきりと狂っています。この原因を耳鼻科の先生や言語聴覚士の方にお伺いしたいと思っているのですが、個人的には聞こえそのもの（例えば純音の聴力レベルや単音の弁別能力）がやはり十分に回復しておらず、声帯、舌、口の動きや、それを指示する脳の機能が回復していないのが大きな原因ではないか、と思っています。